The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界　文法化・待遇表現・発話行為』
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	語文. 2015, 104, p. 73-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界　文法化・待遇表現・発話行為』

百　瀬　みのり

本書は、歴史語用論の観点から編まれた一一人の論者による論考を、四部構成にまとめた論文集である。以下、その概略を示す。

第1部《文法化と待遇表現》：小野寺典子の「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」（第1章）では、談話標識の通時的発達について「文法化」を捉え直し、文の「周辺部」を重要点と考える。福元広二の「初期近代英語期における仮定法の衰退とI think の文法化」（第2章）は、挿入詞I think の確立と、I think の従属節中の仮定法衰退の相関性を示す。森山由紀子の「11世紀初頭の日本語における聞き手敬語「―はべり」の方略的運用―社会言語学的要因と語用論的要因をめぐって」（第3章）は、「―侍り」について、社会言語学的な観点に加え語用論的な観点で眺めて考察する。

第2部《ひとを取り調べる》：椎名美智の「初期近代英語期の法廷言語の特徴―「取り調べ」における「呼びかけ語」の使用と機能」（第4章）は、英語の呼びかけ語の発話への作用を示す。高田博行「ドイツの魔女裁判尋問調書（1649年）に記された ことば―裁判所書記官の言語意識をめぐって」（第5章）は、魔女裁判尋問記録における言語使用を、当時の社会的文脈と関連づけて再構成する。諸星美智直「近世期吟味控類における「尋問」と「釈明」のストラテジーについて」（第6章）は、口語的な吟味控類を資料とし、吟味する側とされる側の方略を検討する。

第3部《ひとを説得する》：片見彰夫「中世イングランド神秘主義者の散文における説得の技法」（第7章）は、反復と変奏、ワードペア（wp）、行為指示型発話行為の果たす説得の文体効果を論じる。中安美奈子「シェイクスピアにおける説得のコミュニケーション―法助動詞を中心に」（第8章）は、方略としての法助動詞を分析し、初期近代英語の説得を考察する。

第4部《ひとに伝える》：芹澤円の「ドイツ最古の週刊新聞の「書きことば性」をめぐって―出来事をどのように報道するのか」（第9章）は、ドイツ最古の週刊新聞と、印刷ビラである「最新報告」の記載を考察する。森勇太「申し出表現の歴史的変遷―授受表現の運用史として」（第10章）は、申し出表現における与益表現の運用を文献からたどり、日本語の利益運用ルールとその変化を明らかにする。高木和子「『源氏物語』に現れた手紙―求愛の和歌の贈答を中心に」（第11章）は、『源氏物語』中の手紙や和歌から、恋愛にまつわる男女の交渉を概観する。

多様な言語資料と多彩な視点でコミュニケーションの場面における言語の史的変化を捉えたところに、本書の最も重要な意義がある。歴史言語学のみならず、古典文学に興味を持つ研究者にも大きな示唆を与える一冊である。

（ひつじ書房、二〇一四年六月、二九七頁、三、六〇〇円＋税）

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）